

世界と意味体系 II

竹 原 弘

はじめに

本稿は『徳山大学論叢』第24号（1985年12月）に掲載された「世界と意味体系」の続編である。『論叢』24号に掲載された小論は、Ⅰ. 相互主観的世界、Ⅱ. 身体的意味、Ⅲ. 言語的意味、といった構成になっており、身体的意味と言語的意味の錯綜した相互主観的世界についての一般的性格の記述がなされた。本稿では、そうしたことを踏まえて、学的意味について考察する。学的意味は、何らかの記号的表現手段によって、日常的に経験される世界を組織化することによって構築される。本稿では、1. パロールと文字言語との対比（二～三）2. 文字言語における私的事柄の記述と学的記述との相違（四）3. 書物と読解者との間の存在関係（五）4. 日常的身体的知覚と自然科学的認識との対比（六～七）5. 自然科学的認識に関するフッサール批判等（八～十）、が論じられている。

Ⅳ 学的意味

（1）

われわれは、身体の世界へ向かっての企投の仕方の分節化による、世界の差異化を基盤として、世界に現出するもろもろの事象を有意味性において捉え、それを己れの身体の世界の内に存在する様態へと接合することによって、世界へと自らを適合せしめる。さらに、身体の企投の様態へと取り込み、かつ身体の企投の様態へと分節される意味と交錯する言語的意味体系を、自ら

のうちに保持することによって、世界の有する有意味性の秩序を他者と共有する。そうした、身体によって了解され、また言語的に了解される意味体系は、身体的主体としてのわれわれが属し、そこにおいて自らの有り方を断えず汲み取るところの全体的世界によって断えず分泌される。全体的世界の断えざる自己形成、自己の乗り越えは、全体的世界の有する意味秩序のうちに自らを挿入しつつ、断えずその中で全体的世界の自己形成へと向かって自らを企投する、個々の身体的主体のもろもろの実践の集積によって為されるといってよい。

われわれは、全体的世界の歴史的形成のプロセスの集積によって既に構成されたもろもろの意味体系を、相互に共有し、全体的世界の構成契機として自らを位置づけることによって、全体的世界の自己形成に参画している。そして、既存の意味体系を自らの生活世界のうちに取り込むことによって、世界へ向かって断えず意味を企投しつつ、既存の意味体系を断えず活性化し、維持する。全体的世界の内に沈澱した様々な意味体系は、人間存在によって断えず世界へ向かっての企投のうちにおいて、その有意味性が維持されなければ、枯渇したものとなり、全体的世界の断えざる自己形成のプロセスから逸脱する。つまり、全体的世界の自己形成に参画することによる、その有する全体的意味体系の構成契機としての位置を喪失する。例えば、刀とか人力車等は、現在では少なくとも、全体的世界を形成するものとしての意味性を喪失しており、歴史的、骨董品的意味しか有しないのは、それらが個々の身体的主体の全体的世界へと参画する自己企投において、それらの存在者が取り込まれていないからであり、全体的世界の構成契機としての意味性を維持されていないからである。全体的世界の自己形成への参画において、われわれは身体的意味と言語的意味とを区別する。身体的意味も言語的意味も、ともに身体が世界へと企投する運動機能へと取り込まれ、身体の企投の構造を為しているのであるが、身体的意味は身体の企投の構造そのものによって無媒介的に意味が把握され分節されるのに対して、言語的意味は言語体系を媒介としなければ、有意味的なものとして把握されない。われわれが言葉を

語る場合に、言語体系^{ラング}のもつ差異体系を媒介としないならば、われわれの言語行為は無意味な音響でしかない。すなわち、自己と他者相互が共有する同一言語体系内^{ラング}においてのみ、言語的意味は有意味的でありうるものであり、異なる言語体系^{ラング}を有する者相互間においては、言語的意味の相互主観的共属性という事態は生じないといえる。

(2)

われわれは、既に以上のような分析を為してきたわけであるが、そうした分析を踏まえて、学的意味についての考察にはいる。学的意味の最初の特徴として、学的意味は基本的に、パロールとしての言語行為のうちにその意味を留めているのではなく、文字言語^{エクリチュール}のうちにその意味を留めているのである、ということ¹⁾を挙げるができる。もちろん、学的意味はパロールを介して語られることにより、その意味の現出を為す場合もあるが、しかし、その基盤は常に文字言語のうちにあるといえよう。つまり、学的意味は文字言語のうちにその意味性を留め、そのことを基盤にして、パロールを介して語られる可能性を有しているのである。なぜ学的意味が文字言語によってその意味が表現されるのか、ということは、文字言語のもつ本質に由来する事柄である。つまり、パロールは時間的空間的な「対話関係の狭さ¹⁾」を有している。すなわち、パロールによって語られる言語的意味は、まず時間的に限定されるという宿命を帯びている。というのは、パロールによって語られる聴覚映像は、瞬間へに消えさる。それが有意味的な言語記号として表象されるのは、対話の相手が一連の音の連鎖を意識の内に記憶することによって、それらを言語体系^{ラング}のうちにある差異の体系を媒介として、有意味的な記号として把握するからである。つまり、パロールは、それが語られた瞬間に対話者の記憶の中に一連の音の連鎖としてその残像を残していないならば、この世から消失してしまうのである。したがって、パロールが世界における、あるいは世界へ向かってのもろもろの企投にとって、有意味性を維持し、そ

注1) P. リクール『解釈の革新』久米博他訳 白水社 1982, 55ページ。

れが語られたという事実を相互主観的世界のうちに痕跡として残しているのは、対話者相互によって、その語られた意味が記憶として保持されている限りにおいてである。対話者相互が、語られた言語的意味を記憶の内から喪失してしまうならば、その言語行為は世界から永遠に消滅することになる。つまり、パロールは、それがパロールでしかない限りは、限定された時間内においてしか世界の内に留まることはないのである。したがって、パロールは空間的にも、その語られた言語的意味を共有する範囲は限定される。なぜならば、パロールはその相互主観的共有が、対話者、あるいは聴衆の記憶に依存するがゆえに、時間的に限定されざるを得ない。それゆえ、その言語的意味を共有するのは、それらが語られた場にいる人間存在に限定される。さらに、パロールの場合には、言語行為の主体と、語る状況とが言語と密接な関連性を有している。語られた言語的意味は、それを受け取る対話者にとって、常に語る主体へと還帰する。つまり、語られる言語的意味は、それ自身が語る主体を離れて自律したものとして世界の内に存在することはないのであり、語られる言語的意味は、語る主体の語る表情、身振り手振り等によって断えず活性化され、そうした言語主体の有する個性、人格性と言語的意味とを分離せしめることはできないのである。パロールにおいては、語る主体が言語的意味の背後に常に現前的であり、言語的意味は語る主体の有する存在感と一体となっているがゆえに、言語的意味は語る主体の個性のもつ色彩によって塗り潰される。それとともに、語る主体が語る状況と、語られる意味とはやはり密接な連関を為している。「いかなる言述にも最終的な指示を供給するのは、結局は、言述の状況によって決定される『ここ』と『いま』である²⁾。」つまり、対話において、語られる状況が対話の言語的意味を大きく規定する。「ここ」と「いま」は、対話者相互の共通の対話的状況を規定する相互主観的な、対話の枠組みである。語る主体が言語によって空間的状況を構成する場合に、語る主体は常に己れの身体が占める「ここ」を基点として、空間的地平を言語的に構成せざるをえない。つまり、「ここ」に対

2) P. リクール 前掲書 191ページ。

する「あそこ」であり、「ここ」にとっての「上」であり「下」というように、「ここ」という基点を軸にして、言語的空間が対話において作り出されるのである。また、「いま」を中心にして、語る主体は言語を時間的に差異化することによって、言語的に時間を構成せざるをえない。つまり「いま」に先立つ時間は、対話者相互にとって、相互主観的に過ぎ去った時間であり、したがって「いま」にとって過去の形態において差異化され、「いま」に続く時間は、「いま」にとってまだ到来していない時間として、対話者相互間で未来という言語的形態によって、「いま」に対して差異化される。このように、「いま」と「ここ」を軸にして、時間的空間的な地平が言語的に構成されることによって、語る主体は「いま」と「ここ」から、時間的空間的地平へ向かって言語的企投を為すのであるといえる。例えば、「昨日、私は東京から帰って来た」という場合に、「いま」という時間的軸を基点として「昨日」という時間を言語的に構成することによって、「いま」という軸を中心にして繰り広げられた時間的地平に対して言語的企投を為す。つまり、「帰って来た」という過去の形態によって、昨日の行為を言語的に構成するということは、昨日という、「いま」にとって過ぎ去った時間の地平上において既に構成された、つまり「身に覚えのある」行為に対して言語的企投を為すのであり、その場合に、過去の形態によって過去への言語的企投を象徴化するのである。そして、「東京から」という副詞句によって、「ここ」という語る主体の身体が占める場所を基点として繰り広げられる空間的地平へと言語的企投を為す。

(3)

それに対して文字言語^{エクリチュール}に関してはどうか。フッサールは次のように述べている。「学問 (Wissenschaft) は、その名の意味する通り、知識に関わりがある。しかし、学問それ自身が知識作用の集計もしくは織物 (ein Gewebe) であるというのではない。学問は文献のうちのみ客観的存立を有するのであり、たとえ学問の存在 (Dasein) が、人間とその知的活動に大

いに関係があるとはいえ、やはり学問は著述という形態でのみ独自の存立を有しているのである。このような形態で学問は数千年来受け継がれ、個人や世代や民族を超えて存続している。このように学問は外的配置 (äußere Veranstaltungen) の集計を表象し、そして外的配置の集計は、多数の個人の認識行為から結果したように、再び無数の個人の認識作用へと移行する³⁾。」学的意味は、フッサールが述べているように、何千年も受け継がれ、しかも個々人や世代を超えて存立するものでなければならない。そのためには、瞬間に消え去り、曖昧な主観性に支えられてのみその痕跡を維持するパロールに、学的意味が自らを留める表現手段を求めるわけにはゆかない。文字言語はパロールと異なり、空間のうちに自らを永遠に留め置くことをその本質とするがゆえに、言語的意味は文字言語によって、それが記述された紙面の上に定着し、個々人の主観性に依存することなく、自らの成立の手段を確保することができる。しかし、文字言語によって表出された言語的意味においては、「もはや筆者と読者に共通の状況はない。同時に指し示す行為の具体的な条件もすでに存在しない⁴⁾。」既に述べたように、パロールにおいては、対話者相互間に、相互主観的な対話状況の枠組みとしての、「いま」と「ここ」によって対話が条件付けられ、「いま」と「ここ」とを軸として時間的、空間的地平が繰り広げられ、対話者はそのように繰り広げられた地平へと、言語的企投を為すことによって、相互主観的言語的状況を保持することができた。しかし、文字言語においては事情はまったく異なる。文字言語においては、対話のごとく互いが言語主体になる可能性は失われ、ア・プリオリに、言語を送る側と言語を受け取る側との関係性が固定され、言語は、言語を送る側によって一方的に、言語を受け取る側へと送られる。つまり、読者は、文字言語が作り出す固定された言語的關係性においては、絶対言語主体にはなりえないのである。そうした、固定された言語的關係性の中では、パロー

3) E. Husserl: Logische Untersuchungen. Erster Band.

Max Niemeyer Verlag Tübingen 1968, S. 12.

4) P. リクール 前掲書 91ページ。

ルの場合のごとき共通の「いま」と「ここ」という、相互主観的枠組は失われる。つまり、文字言語の場合の言語主体にとっての「いま」と「ここ」は、読解者にとっての「いま」と「ここ」ではないのであり、それゆえ、「いま」と「ここ」は、文字言語を媒介として形成される言語的関係性においては、相互が共属する相互主観的な対話的枠組ではないのである。それゆえ、時間と空間は、文字言語においては、基軸、あるいは地平を繰り広げる中心点を失う。それゆえ、読解者は、言語主体の「ここ」と「いま」に自らの「ここ」と「いま」とを重ね合わせるという行為を、想像力によって為さなければならない。というのは、読解者は言語主体には成りえないがゆえに、言語主体に対して、自らの身体が占める「ここ」と「いま」とを押しつけることはできないがゆえに、言語主体が置かれた「ここ」と「いま」へと、自らを意識の中で移すということを為さなければならない。しかし、そのような操作によっても、両者の「ここ」と「いま」とは完全に一致するということは、ほとんど望まれえないのであり、したがって両者が共通の言語的状況を共有する可能性はないといってよい。したがって、時間の場合も空間の場合も、言語主体にとっての基軸と、読解者にとっての基軸とのずれが断えず生ずるがゆえに、文字言語の読解において、時間地平と空間地平は、漠然としたものとなる。さらにメルロ＝ポンティが述べているごとく、「書かれた言葉 (l'écrit)こそが、『潜在的』対話として、いかなる生きた主体によっても支えられておらず、原理的にすべての人に属する、XからXへの言語行為として⁵⁾作用するのであるといえる。すなわち、文字言語においては、パロールにおけるごとく言語主体が言語的意味の背後に現前しつつ、言語主体が言葉を語る際の所作や口調、語られる際に対話者相互を取り巻く様々な共通の状況等によって、言語的意味を活性化し、そうしたもろもろの状況を伴って相手に意味を送るといったことは生じえない。文字言語の場合には、言語主体は読解者に対して現前的ではなく、文字言語によって織られた多様な意味構成体の背後に、いわば匿名的なXとして存在しているにすぎない。

5) M. Merleau-ponty : Résumés de cours. Gallimard. 1968, p. 166.

読解者は文字言語を送る言語主体に関して何らかの知識をもっている、あるいは言語主体と親密な関係であったとしても、文字言語の表出する意味には、生きた言語主体の相貌は失われている。なぜならば、文字言語は紙面の上に意味を固定せしめることにより、言語の意味が不安定な主観性にもみ維持され、結局は世界から消失してしまうことを妨ぐるのであるが、そのために文字言語は原理的に、それが記述されて以降のいかなる時代の人間に対しても開かれたものとして読解されうる可能性を獲得する。つまり、文字言語は特定の人間に対してのみ意味を送るのではなくて、あらゆる人間に対して意味を送る可能性を有しているといえる。例え、それが書簡という形式で特定の人間に対してのみ書かれたとしても、である。文字言語が、紙面の上に言語的意味を固定するという事は、言語主体の世界への独自の関与、言語主体が記述する際の様々な状況、そして言語主体の帰属する、言語主体にとっての「ここ」と「いま」から、言語的意味を切り離すということにほかならない。文字言語によって、紙面に言語的意味が固定され、それが言語主体の世界への言語的企投、つまり言語的行為を離れて自律した客観的存在を獲得するという事は、言語的意味が言語主体の有する個別の状況から独立した存在となるということの意味する。したがって、文字言語は言語主体の言語行為と、それを取り巻き条件付けるもろもろの状況を離れて、紙面の上に自らが表出する意味を凝結せしめるがゆえに、言語主体を匿名的なXとして背後に退けて、即自的に自らの足で立つのである。それゆえ、読解者は言語的意味を言語主体と結び付けずに、言語主体から切り離して理解するのである。つまり、「テキストとは、もう作者の志向がそれを生気づけることがない、自律的な意味作用の空間である⁶⁾。」

(4)

エクリチュール
文字言語はこのように、パロールとは異なって、言語的意味が紙面の上に固定されることによって、言語行為が為されるもろもろの条件から言語的意

6) P. リクール 前掲書 100ページ。

味が自律するがゆえに、言語行為という瞬間的所作の後にも、その痕跡は永続する。それゆえに、学的意味は文字言語によって表現され、そこに学的意味の基礎を置くわけである。しかし、もちろんすべての文字言語が学的意味の表出を為しているわけではない。日常的出来事や私的な事柄が表出する意味も、文字言語が捉えて言語的意味として紙面に固定せしめる場合もあるからである。それでは、学的意味の学的意味たる由縁は何処に有るのであろうか。人間存在は、全体的世界の有する意味秩序の中で、その意味秩序に則して様々な企投を為すわけであるが、その人間存在が全体的世界によって分泌され、また個々人の全体的世界の生成への企投によって維持されている意味秩序に適合しつつ、断えず様々な領域において新たな意味を産出すべく、世界へ向かって新たな企投を為す。そうした、人間の意味への企投、あるいは意味の世界への企投を様々なかたちで文字言語でもって表現することにより、言語的意味へと凝結せしめる。意味への企投とは、自らの存在を既存の構成された意味秩序へと適合せしめるべく、自己自身を世界へと投げ出すことであり、われわれの日常的行為の大部分は、この意味への企投である。それに対して、意味を世界へと企投するということは、世界のうちに新たな意味を生み出すべく、世界へ向かって自己を投げ出す行為にはかならない。例えば、新発見を為したとか、ある文献についての新しい解釈を為したとか等々であり、既に構成されて、全体的世界の構成要素として、世界の内に、あるいは個々人の全体的世界の生成へと参画する営みのうちに沈澱することによって、個々人の世界への企投を正当化付けている意味体系の層の上に、あるいはそれを破壊することによって、新しい意味を全体的世界における個々人の営為に付け加えることである。そうした様々な人間の営為を文字言語でもって表現することによって、われわれは言語的企投を為すわけであり、そうした人間の意味への関与を、言語的意味へと移すことが言語的企投である。その場合に、文字言語として紙面へと凝結された言語的意味が、学的意味であるためには、全体的世界における個別の人間存在のある企投についての具体的な記述であってはならない。個別の人間存在のある世界への企投、例えばある

人間の育児の記録であるとか、登山の記録、あるいは闘病生活の記録等は、文学、あるいはルポルタージュとしての意味はもち得るが、学的意味ではない。言語的意味が学的意味であるためには、全体的世界における人間のある企投の構造についての記述でなければならない。育児について考えるならば、ある母親が子供を育てたという記録は、個別の人間の個別的な企投の記述でしかなく、言語的意味は育児という、人間の世界への企投の構造を表出してはいない。育児という企投が、育児学あるいは幼児教育学等になるためには、子供を育てるという人間一般の企投の構造を言語化しなければならない。すなわち、幼児とはどのような存在であり、どのように取り扱うべきか、等々といった、幼児を育てるという企投の有する構造についての記述でなければならない。企投が向かうべき対象の有するもろもろの意味の秩序付けを為すということは、いい換えるならば、その対象へと企投する仕方を構造化するということであり、企投が対象の有する意味の秩序に従って分節され、多面化されるということになる。ある人間の闘病の記録についての言語的意味は、個別の人間の個別的な企投についての記述でしかなく、学的意味をもたないのは、それがやはり病の、あるいは身体の失患という意味への企投の構造の記述ではないからである。西欧における最初の医学者の一人であるとされているヒポクラテスは、次のように述べている。「さて、人間の身体はその中に血液、粘液、黄胆汁、黒胆汁をもっている。これらが人間の身体の自然性であり、これらによって病みもし健康にもなる。一番健康を得るのは、これら相互の混合の割合と性能と量が調和を得、混合が充分である場合である。病苦を病むのは、これらのどれかが過少か過多であったり、身体内で遊離して全体と混合していなかったりする場合である。もし、これらのどれかが遊離して孤立するならば、その遊離した身体部位が病気になるばかりでなく、それが位置を占め流れ寄せた身体部位がその過度の充満のために苦しみと痛みをひき起こすのである⁷⁾。」ヒポクラテスは、このように人間の体液のバランスによって健康にもなり、病にもなると考えた。現代医学か

7) ヒポクラテス『医術について』小川政恭訳 岩波文庫 102f ページ。

らするならば稚拙ではあるが、しかし先に引用したヒポクラテスのテキストが学的意味を有する文字言語であるのは、ヒポクラテスが病という意味の秩序付けを為しているからであり、その事によって、病を治療するという人間存在の病という意味への企投を構造化せしめているからである。自然科学のごとく、人間を学の対象とするのではない学問についても、事情は同じである。自然を数学的に分節することによって、自然から引き出された数学的意味は、何ら人間的な要素を含んでいない無機的諸契機への自然の分解であるが、しかし、数学的言語は、人為的なものであり、全体的世界の歴史的な自己形成によって産出され、かつ引き継がれたものにほかならないがゆえに、自然を数学的な言語の網で把握して、そこから数学的な意味を導出するということは、全体的世界の意味秩序へと自らを適合せしめ、その意味秩序に従って自然を解読する人間存在の全体的世界における企投の反映にほかならない。自然の数学化は、それゆえ、全体的世界に沈澱した意味表現の手段としての数学的言語の、自然への企投として、人間の自然への関わりを、全体的世界の有する意味表現の手段の集積を媒介として為す営みの表現であるがゆえに、人間の企投の構造の直接的言語化ではないが、人間の企投の構造の媒介された言語化であるといえる。

(5)

文字言語によって紙面の上に表出される学的意味は、書物という形態の下に、全体的世界のうちに集積され、継承されてゆく。書物は図書館や個人の書斎の書架、あるいは書店の書架に置かれることによって、読解者に対して、自らが貯蔵している意味の集合を送る可能性を開く。もしある書物が図書館の片隅に放置されたまま、いかなる読解者によっても、書物の中に貯蔵されてある言語が読解されないならば、その書物は、図書館の片隅という一空間を占める単なる物質へと自らを閉塞せしめ、自らの内に貯蔵された意味の集合は、読解者をもたないがゆえに、世界へと意味を放出することにより、全体的世界に集積された多様な意味空間へと自らを重ね合わせるという

ことをしない。「言述が世界に関わる le discours se réfère au monde⁸⁾」のは、文字言語の場合には、読解されることによってであり、読解者の読むという行為を媒介として、あるいは、読解者が世界へと関与する自らの有り方のうちに、読解された言語的意味を重ね合わせることによって、世界に対するパースペクティヴの転換を為す、つまり世界に対するある新しい見方、関わり方を自らの有り方の中に確立することを媒介としてである。つまり、書物は読解者を持つことによって、自らの中に蓄積している意味を世界へと開くのであり、読解者が世界へ向かって企投する主体として有ることを介して、世界へと関与するのであるといえる。しかし、書物と読解者との間の連関は1対1的な連関ではなく、書物は印刷されることによって、時間的にも空間的にも、自らの有する言語的意味を世界に向かって開く可能性を無限にもつ。すなわち、文字言語の意味集合体は、1人の読解者を介して世界へと関わり、既存の意味構成体の上に自らを重ね合わせることによって、世界の意味連関の集合にある変様をもたらすのではなく、相互主観的共属態となることにより、相互主観的に世界へと属する側面において、世界へと属する有り方の転換を為す契機となるのである。書物が読解者の世界への企投を介して、物質性としての自らの特性のうちに固着せしめた意味を世界へと放出し、読解者に対して、世界への企投の新たな側面を示しうることは、1個の人間とその私的世界との関連の転換を意味するのではなくて、複数の人間存在の有り方としての、全体的世界における意味の産出への参画の、あるいは全体的世界における人間存在の錯綜の転換を意味する。全体的世界において、全体的世界の秩序性を維持することに参画している人間存在は、全体的世界の秩序性を支える意味体系全体のある部分を共有することによって、相互主観的意味領域を形成する。全体的世界の意味体系全体の一翼を担いつつ、全体的世界の自己形成に参画している会社組織は、その会社組織を構成する人間存在のみが共有する意味体系によってその存立が維持されている。会社組織を維持する意味体系（社則、商品、商品を生産する機械、商品を生産するプ

8) P. Ricœur : La métaphore vive. Éditions du sevil, Paris 1975, p. 273.

ロセス、技術、商品販売のルート等）は、それを共有することによって、それを維持することへ向かって企投を為す人間存在の、その意味体系への自らの存在の関与の仕方の多様態の錯綜によって支えられているといつてよい。すなわち、会社組織が個々の構成員に振り分ける役割分担の多様性は、会社組織の有する意味体系への個々人の関与の仕方の多様性を意味する。会社組織を支える意味体系を維持する個々の人間存在は、各々の意味体系への関与の仕方を規定する役割分担に従って、世界へ向かって経済的企投を為すのであるが、その企投の仕方は各々が書物から獲得するのであり、世界の経済的な意味秩序に関する言語的意味を書物から受容することによって、自らの世界へ向かっての企投が切り開く、世界地平の上に経済的展望を作り上げる。そのことにより、個々人は自らが関与する世界の経済的な側面への企投の仕方を己れの存在の仕方のうちに確立し、会社組織を支える意味体系を維持する人間存在の錯綜のうちへと自らの存在を参画せしめ、意味体系維持の一翼を担うのである。そして、その場合、個々人の書物との関わりによって獲得する、世界の経済的意味秩序への企投の仕方は、会社組織の意味体系を維持する人間存在の有り方の錯綜へと組み込まれることによって、その存在の錯綜のある転換を為すという結果を引き起こす。

書物という物質のもつ物質性の上に、印刷というかたちで物質的形象を与えられた言語的意味は、その物質性のゆえに、パロールと異なって、時間的にも空間的にもより広い範囲にわたって、相互主観的な存在の錯綜態、意味への共属性、あるいは意味への共同主観的帰属態の転換を引き起こす。学的意味は、それが全体的世界における人間存在の世界への企投の構造の言語的意味への凝結であるがゆえに、ときには全体的世界そのものの転換、すなわち全体的世界に帰属する人間存在のその総体的な存在交錯の転換を為す場合もある。例えば、コペルニクスによって最初に提唱され、ケプラー、ガリレオによって継承された、プトレマイオス的な地球中心的宇宙観のパラダイムの否定は、その教説が書物へと刻印され、流布されることによって、ヨーロッパにおけるキリスト教的世界観が産出する意味秩序へと帰属するなかで、ヨー

ロッパという全体的世界のうちに自らの存在の安住を得ていた人々の、自然との関わりの中での、自らがその存在する場を得ている大地と、天空を移動する太陽との関係の転換を迫られる。その関係の転換は、単に自然との関わりの中でのみ生ずるのではなくて、人々が各々の有り方を適合せしめていたキリスト教的な秩序の転換をも意味するものであったがゆえに、キリスト教的意味秩序へと帰属する存在の交錯の転換を意味し、ヨーロッパという全体的世界のキリスト教的に秩序付けられた共同体としての有り方の乗り超えを意味する。また、フランス革命以前のアンシャン・レژیームにおける被抑圧層である、農民や都市の労働者達には、フランスという全体的世界を構成する抑圧の構造全体に対する認識はもたなかったわけであり、あるのは自分達の私的世界における困窮と、その直接的原因である領主への憎悪の感情のみであったであろう。フランス革命の直接的原因となったのは、そうした農民達や労働者達の私的世界における困窮であったであろうが、しかし、被抑圧層のそうした生活の困窮を革命的行動へと駆り立てる原動力とするためには、彼らに対して、矛盾に満ちた絶対王政という政治形態の下に、様々な意味が秩序付けられていた全体的世界の俯瞰図が与えられなければならないわけであり、それを為したのがいわゆる啓蒙思想家であるヴォルテール、モンテスキュー、ディドロ、ルソーであった。彼らは絶対王政が含有する矛盾を何らかのかたちで認識し、それを止揚した社会的政治形態の見取図をもっていただけであり、その意味で、彼らは世界を認識していたのであるといえる。学的意味は、それが読解者達によって、彼らの世界との関わりという存在関係の中に取り入れられることによって、ときとして、その存在関係そのものに光が当てられ、存在交錯という相互主観的な基盤の転換を為す契機となる。学的意味を通して、全体的世界における個々人の有り方、世界との存在関係の構造が、彼らの日常生活様式の上に重ね合わされなければ、人々は自らが立つ大地が宇宙の中心であり、太陽は彼らが立つ大地の上を移動すると信じていたであろうし、またフランス革命以前のフランスの農民や労働者達は、自分達の生活の困窮を甘受しないまでも、国王を頂点としたヒエラルキー

を否定する行動にまでは到らなかったであろう。学的意味は、個々人の多様な世界への関わりの構造を明確化することにより、身体的企投によって開示される世界の遠近法的な秩序付けを、世界との関わりの全体的な視点の獲得へと止揚せしめる。すなわち、学的意味を自らの企投の様態へと取り入れることによって、個々人は各々の身体的存在によって限界付けられていた世界への視点を超えて、世界を俯瞰する視点を獲得する。つまり、自らの身体的存在が宿命的に固着せしめられていた大地から天空を眺める視点から、天空から大地を、つまり地球を眺め、地球と太陽との関係、あるいは太陽系全体というシステムの中での地球の位置付けを知ることができるようになる。あるいは、自己の私的世界への経済的企投によってのみ切り開かれる経済的困窮の状況を、全体的世界の構造がもつ経済的因果的関連性の網目へと位置付けすることによる、私的世界の経済状況の全体との関連における捉え直しの視点の獲得が可能となる。このように、学的意味による展望の拡大、個々人が関わる私的意味世界の全体的構造連関への還元は、既に述べたごとく、個々人が書物へと刻印された学的意味の読解を通して、それを世界へと向かう自らの有り方のうちへと取り込むことによって為されるわけであるが、そうした世界へ向かう有り方は、他の人間存在の有り方との交錯によって相互主観的共同体を形成しているわけである。したがって、学的意味の自らの存在の仕方への還元は、存在の相互主観的交錯の転換、つまり、相互主観的存在交錯の中での、世界への視点の止揚を意味する。そのことは、世界の自己認識、世界の自己超克を意味するといつてよい。全体的世界は、個々の人間存在の相互関与、相互存在交錯を離れて有るのではなく、そうした個々の人間存在の有り方の相互交錯による、あるいは役割分担の遂行による、意味の存立の相互維持の総体の異名にほかならない。全体的世界は、いい換えるならば、統一の意味構成体であり、個々人の存在が相互交錯することによって意味を維持し、そのことにより意味は相互主観的な共有体となり、全体的世界の存立の中で己れの存在を得るのである。そうした、個々の人間存在の世界への企投、意味への適応の企ての交錯の総体としての相互主観的共同体が全

体的世界であるが、学的意味はそうした全体的世界における既存の意味構成体の基礎の上に、それらの乗り越えの試みとして、ある1個の人間存在の企てとして産出される。学的意味は、既に述べたごとく、人間存在の全体的世界の中での企投の構造の言語化であり、いわば私的な企てによって開かれる私的状況の止揚としての、私的な生活体験の中での私的な世界への視点の、構造化された人間と世界との存在連関についての視点への転換である。そして、それが書物の中に物質化されることによって、意味の物質としての紙面への固着が為され、相互主観的存在交錯へと還元される。したがって、学的意味が、書物を介して相互主観的共属体となるということは、世界についての、あるいは人間存在と世界との存在連関についての認識が、私的な企投を超えたところで、つまり相互主観的な存在交錯の網目の中で為されるということにほかならないのであり、したがって、全体的世界が自らを認識することになるのである。そして、学的意味の相互主観的な基盤としての存在交錯の転換を為すということは、既存の相互主観的存在の乗り越えを意味するわけであり、そのことは全体的世界が自らを乗り越えるということの意味する。全体的世界の乗り越えは、したがって、学的意味を契機として為されるか、あるいはそれが大きな役割を果たしていることが多い。全体的世界が古い意味体系から脱皮するということは、同時に全体的世界の内に新たな意味体系を産出するということの意味する。それとともに、全体的世界の乗り越えは、真と偽、善と悪との基準でもある。プトレマイオスの宇宙観が虚偽になったのは、それがコペルニクスの宇宙観によって否定されたからではなくて、全体的世界がプトレマイオスの宇宙観というパラダイム、あるいはそれに基づく意味体系によって、自らの秩序を維持していた有り方を乗り越えて、コペルニクスの宇宙観というパラダイムによって、大地と天体との相関関係を説明する宇宙観でもって全体的世界の秩序の組み替えを為したからである。コペルニクスが天動説を否定し、ガリレオが『新科学対話』を出版した時点では、まだ天動説は虚偽ではなかったのであり、コペルニクスやガリレオ等の一部の自然科学者にとってのみそれは虚偽として否定されたに

すぎなかったのである。つまり、その時点では、全体的世界の意味秩序は、プロトレマイオスのパラダイムによって維持されていたわけであり、キリスト教的な世界観が支配的であったがゆえに、まだ全体的世界の意味秩序の組み替えは、コペルニクスの天動説へと動いてはいなかったのである。したがって、全体的世界の意味体系の維持に参画する大部分の人々の日常生活世界における、人々の存在が根を張る大地と太陽の存在関係は、やはりプロトレマイオスのパラダイムの継承に基づくものであったわけである。プロトレマイオスのパラダイムの真理性が剥奪されるのは、全体的世界の意味体系がコペルニクスのパラダイムへと組み替えを為すときであり、その時にはじめて、プロトレマイオスの宇宙観とコペルニクスの宇宙観との間の真偽関係が明確になるのである。パラダイムの転換は、全体的世界における人間存在と意味との存在関係の変更を意味し、そして、それはそのパラダイムに関しての全体的世界の自己の乗り超えにほかならない。そして、ある命題に関して、全体的世界がそれを否定して、新しいパラダイムをその意味連関の枠組として受容するということが、真偽に関しての基準にほかならないのであり、いかに科学者がその真理性を主張する命題であったとしても、全体的世界においてその命題に基づいて意味の集合が為されないならば、その命題の真理性は、全体的世界の中に確立されない。真偽と同じように、善悪の基準も全体的世界の乗り超えによって作り出される。独裁的政治形態が悪であるのは、その政治形態の下での被抑圧者達の生活の困窮が他の政治形態に比べて大であるからではなく、その政治形態が全体的世界によって既に乗り超えられることによって否定されたからである。独裁的政治形態の下では、独裁的政治権力者は、自らが支配する全体的世界におけるあらゆる権力を掌中に収め、あらゆる人々を自らの有する権力によって抑圧することは正当化されるのであり、被抑圧者達は独裁者の栄光のためにのみ自らの生活を犠牲にすべきであった。そうした、一握りの権力者が無限の権力を、彼らの全体的世界において占める役割分担へと集中せしめ、大部分の被抑圧者達が権力者のために自らの存在を犠牲にするという構図は、独裁的政治形態の下においては、正当化され

たわけである。全体的世界におけるそうした構図が悪となるのは、それが全体的世界によって何らかのかたちで乗り超えられることによってである。独裁体制の下で、被抑圧者達がいかに虐待されたとしても、独裁体制という政治的枠組の下に意味が秩序付けられた全体的世界においては、そうした被抑圧者の虐待を悪とみなす根拠となる意味体系は何処にも無いわけである。ある何人かの革命家、宗教家、思想家等がそうした独裁体制を否定する新しい倫理的意味体系を全体的世界において企投し、それによって全体的世界の意味体系の総体的秩序変更が為されたときに、つまり独裁的政治形態という枠組みに基づいて配列された意味の秩序性が破壊されたときに、独裁的政治形態が配列した意味によって正当化された行為は否定されるのであり、つまり、独裁体制という政治的な有り方そのものが否定されるのである。

(6)

われわれは、今までの考察において、学的意味を全体的世界の中での相互主観的存在連関との関わりの下に見てきたわけであるが、次に、さらに焦点を絞って、自然科学を考察の対象としたい。つまり、自然科学を学一般のモデルとして考え、自然科学における学的意味がいかなるものであり、人間存在の全体的世界における有り方から、いかにして産出されたのか、を見てゆきたい。

自然科学の学的意味を考察するに先立ち、自然というものが、われわれの日常的有り方としての身体的感覚器官による、われわれの世界への現前、世界への企投に対してどのように現前するのか、ということをもまず考えてゆきたい。既に述べたごとく⁹⁾、われわれは身体的存在として世界へと現前しており、世界はそうした世界へ向かってゆくわれわれの身体的能力、世界において自らの意図を実現すべく企投する身体に対して、そのアスペクトを提示する。フッサーは、身体が世界において己れの意図を実現するために、あれこれの事物存在へと関与しうるそうした身体的能力を、キネステーゼ

9) 拙稿「世界と意味体系」『徳山大学論叢』24号参照。

(Kinästhesie) とよび、世界はそうした身体的能作作用と交叉し、絡み合うことによって、身体的能力の体系との組み合わせとして現出する。すなわち、「このキネステーゼの支配——ここですべての物体知覚において機能するものとして示されるのであるが——つまり、意識的に自由に処理しうる慣れ親しまれたキネステーゼの全体系は、そのときどきのキネステーゼ的状况において現実化され、つねに物体現出の状況、すなわち知覚野の状況と結びついている。ある物体が、この同じ物体として知覚可能である現出の多様性には、それに帰属しているキネステーゼが独自の仕方に対応している。そして一般にこの物体の現われが、物体それ自身を、その特性において呈示しうるためには、そのキネステーゼを経過させるにおいて、それに対応し、ともに要請される現われが登場しなければならない¹⁰⁾。」身体のキネステーゼ体系は、世界へと住み込むことにより世界のもろもろの存在者としての物体と存在交錯を為しており、物体の現われは身体のキネステーゼ体系との交叉という場面において、身体の企投に則して、その応答として為される。「我々が自然というものを知っているのは、自然が身体的—キネステーゼ的な構成能作と関係している程度に依拠してでしかない。したがって、我々は自然について、他のことは何も知らないし、それ以上のことは知らない。自然とは、我々にとっては、この身体的出来事において『告知』されるもの以外ではありえない¹¹⁾。」世界は、私の身体が位置する時間的空間的な「いま」と「ここ」という原点を中心にして、遠近法的に時間的空間的地平を展開する。私のキネステーゼ体系に対してその側面を示す物体は、私のキネステーゼに対して、私の身体が占める時間的空間的な原点としての「ここ」と「いま」から放射される時間的空間的パースペクティブの相の下に組み込まれることによってのみその相貌を提示せざるをえない。例えば、私が私の身体の背後に有るコ

10) E. Husserl : Die Krisis der europäischen Wissenschaften und die transzendente phänomenologie. Husserliana Bd. VI 1962, Martinus Nijhoff. S. 109.

11) L. Landgrebe : Reflexionen zu Husserls Konstitutionslehre. in Tijdschrift voor Filosofie 1974, S. 479. 邦訳「フッサールの構成論についての反省」小川侃訳『現象学の根本問題』晃洋書房 1978, 73ページ。

ーヒーカップを、私の身体の有するキネステーズを駆使して攪むためには、私の身体が空間上に占めており、そこから空間的世界地平が繰り上げられる「ここ」から為さなければならず、それが私の背後に有る場合には、私は私の身体を回転せしめて、私の視野に含まれない、私の潜在的知覚野であった私の背後に有るべき世界空間を、私の視野に収めるか、もしくは、手を私の身体の背後に延ばすことによって、手という私のキネステーズ体系の一構成要素が、私の背後の世界空間をその能力の支配下に治めることにより、つまり、私の身体が処理しうる空間を延長するか、することによって為さなければならない。また、私が私の身体の背後に有るコーヒーカップを攪むために、私の身体を回転させるか、もしくは、私の背後の私の空間処理能力にとって馴染みのある世界空間へと手を延ばすのであるが、その場合、私は私の身体が時間の中で占めることによって、過去と未来とを分節する「いま」から、来たるべき次の瞬間としての未来に向かって為すのであり、私とそのコーヒーカップとの関わりにおいて繰り上げるはずであるもろもろの行為、つまりコーヒーカップにコーヒーを入れ、それを飲み、また私の背後のテーブルに置くといったもろもろの行為を、私は次に為すべき行為として、私のキネステーズのうちに予定として刻印せしめることによって、私の「いま」から、来たるべき未来という時間地平へ向かって企てを為すのである。あるいは、そのコーヒーカップが一週間前に買われて、私の部屋に有るということをして私が想起する場合には、私はやはり「いま」を中心として過去へと繰り上げられる時間地平の下に、そのコーヒーカップが私の所有となった事態を位置付ける。つまり、私とそのコーヒーカップを使用する場合、未来へ向かってそれを使用するとともに、「まだ一週間しか使用していない」という、そのコーヒーカップの使用の、「いま」に先立つ時間的系列を、断えず想起する。すなわち、このコーヒーカップはまだ一週間しか使用していないがゆえに、まだあと二三年は使用できるであろう、といった具合にである。「いま」という、身体が面している時間的原点を軸にして、過去の時間地平と未来的時間地平が交錯するのであり、いい換えれば、私の身体が世界へと関与する

のは、「いま」を中心とした、過去と未来との交叉の中においてである。

そして、私の身体が占める時間的空間的原点としての「ここ」と「いま」は、私の身体が有するキネステーゼの世界への能作のうちに融合して一体なものとなっている。私の身体の一つ一つの所作は、時間的には「いま」から、空間的には「ここ」から、時間的空間的地平への企投として、時間性と空間性の融合として有る。コーヒーカップに手を延ばすという私の身体の所作は、空間性と時間性との融合態であり、「ここ」から「そこ」へ、「いま」から「次の瞬間」へ、という時間的空間的両契機が、私が自分の手をコーヒーカップへと延ばすという所作の中で一体となって潜んでいるのであるといてよい。さらに、私の身体の能作が集約される極としてのコーヒーカップも、その時間的なアスペクトと空間的なアスペクトが分離したものとして、私のキネステーゼ体系と交錯するのではなく、コーヒーカップは私の身体との存在関係の中で、私の身体の所作が織り為す時間性空間性の統一体の中に組み込まれることによって、己れの存在のうちに時間性と空間性とを融合せしめる。つまり、コーヒーカップが私の身体の背後に存在するという空間的なアスペクトと、それが一週間前に私によって買われたものとして、未来へ向かう私の身体の企てに適合することによって、その存在を未来へと延長せしめるという時間的なアスペクトは、コーヒーカップの存在のうちに、あるいは私の身体の能作が為す知覚によって把握されたもののうちに、分離したものとしてではなく、両契機が一体となったものとして有る。

自然の知覚は、身体的主観に対して現前する対象としてその有るがままの姿において為されるのではない。「有るがままの姿」といったものは、カントのいう物自体と同様に認識されえないものであり、われわれが自然を知覚し、自然に対して働きかけるのは、われわれの存在の要求に則してであり、いい換えるならば、われわれが自らの存在を参画せしめている全体的世界がその中においてわれわれに与える世界への関与の様式を、われわれが遂行してゆく中で為す身体的企投に則してである。われわれが世界の内に存在している個々の存在者へと関わる様式、つまりわれわれの身体の振舞いは、全体

的世界によって与えられ、ア・プリオリな体系としてのキネステーゼの上に重ね合わされることによって、それを世界のうちに沈澱している意味秩序への適合へと導いてゆく。われわれの身体的所作の様式は、世界によって分泌され、また相互主観的な存在交錯のうちへと沈澱している意味への適合を要求する全体的世界によって与えられるのであり、ア・プリオリなキネステーゼ体系を単に物理的に駆使することによってではない。自然はそうした全体的世界の有する意味体系へと適合せしめることによって、自らの企投の様式を確立する身体的存在に対して現出するのである。例えば海は漁師にとっては、全体的世界において課せられた役割分担を遂行する場であり、その上を航行する船の乗客にとっては、旅の目的地への通過点である。いい換えれば、人間存在の自然への関わりは、全体世界において構成された意味秩序への適合の延長として為される。しかし、自然は全体的世界という人為的構築体の外に存在して、全体的世界を外から輪郭付け、限界付けているのではない。つまり、人為的構築体としての全体的世界が、いかなる人間の意味も刻印されることのない自然界との間に限界を設けて、そうした全体的世界の彼方に存在する自然との間に一線を画している、ということは無いのである。一千光年彼方に有る北極星も、それが人間に対して方向を定める役割をしているならば、それは人間存在の全体的世界の自己生成への参画によって作り出された様々な道具存在の有する有意味性と同じ有意味性を帯びているのである。つまり、人間存在は砂漠や大海原を旅するときに、北極星の指示に従って方角を定める場合、北極星は全体的世界の彼方に存在することにより、人間の全体的世界におけるもろもろの有り方への関与を拒絶する存在ではなく、人間の企投がもろもろの道具存在の有意味性へと適合することによって自らの意図を実現するごとく、北極星が人間存在に投げかける方角の定位という有意味性へと人間存在が自らの存在を適合することによって、目的地へと到達するという意図を実現する、そうした人間存在のもろもろの企てへと関与する存在である。また、自然は全体的世界の中にも存在しているといえる。われわれ人間存在自身が人為的ではないという意味での自然的要素を有してい

る。生命体としての人間の身体のメカニズムは、まさに自然的存在であり、生命体としてのその生理的構造や機能が維持されているがゆえに、そうした自然的要素の上に、全体的世界への適合によって、全体的世界から汲み取る人為的意味を重ね合わせて、自然的要素と人為的要素の複合体として有るのである。また、全体的世界における人間のもろもろの企投によって産出された道具的存在も、それが全体的世界の意味秩序に則する人間の企投へと適合する限りにおいては、全体的世界によって産出された有意味性、つまり全体的世界における人間存在の相互主観的存在交錯によって維持される有意味性を有しているのであるが、しかしそれらも物体としてのもろもろの性質を全く排除されたものとして有るのではない。つまり、いわゆる文明の所産としてのもろもろの存在者も、一個の物理的存在としての要素を合わせ持っているのである。したがって、全体的世界の内にも、われわれの日常生活のルーティーンの遂行の中では隠蔽されている自然が有るのである。われわれは日常生活のもろもろの営みの中で、身体の世界へのもろもろの企投が、その意図を実現する媒体としての有意味的存在が、その意味性の背後に自然的秩序に帰属することによって、物質性としての己れの存在を維持しているという側面を忘却している。しかし、全体的世界の様々な身体的意味の体系は、自然的秩序の枠組みに基づき、それへと順応することに基づいているのにはかならない。例えば、階段はわれわれの身体の有する物質性が引力の法則という自然的秩序の一側面によって、大地へと定着せしめられているという事実を前提として作り上げられているのである。

(7)

われわれは学以前の、身体の日常感覚が把握する自然を考察したわけであるが、そうした身体のキネステーズに対して現前する自然を、自然科学はどのようなかたちで捉え直し、変様せしめるのであろうか。自然科学は数学的言語によって自然を把握し、表現する。このことは、自然科学が自然を表現する場合に、われわれが既に見て来た、日常生活体験の中でのキネステ-

ゼ体系との交錯によって身体に現前する自然、つまり自然の感性的要素を排除する、ということの意味する。既に述べたように¹²⁾、日常言語は身体的意味とはその秩序性を異にするのであるが、相互に交換可能なシステムである。つまり、言語的に表現された意味を身体の機能組織へと取り入れて、身体的な意味へと秩序転換を為し、また逆に身体的に把握され、身体機能へと取り込まれた意味を、言語的な体系に基づく意味集合へと転換することは可能であった。そのことは、日常言語の体系が、言語習慣の集積に基づいて構成されたということと無関係ではない。言語体系の法則性に基づいて、われわれは言語を駆使するのであるが、しかし、言語体系の有する法則性は人為的なものであるというよりも、むしろ言語習慣総体の集積の結果であり、個々の言語主体の意志を超越したところで形成されたものである。したがって、ある言語的表現が、法則に適合しているのは、つまり言語体系の有する秩序性に基づいているといっているのは、その言語表現の形式的な秩序性が、過去の言語行為の集積によって保証されているが故であるということになる。つまり、言語のもつ法則性を保証するのは、論理的整合性であるよりは、むしろ過去の言語行為の集積にほかならない。例えば、フランス語の補語人称代名詞が動詞の前に位置しなければならないという論理的必然性は何処にも無いわけであり、そうした規則性は、フランス語という言語体系に基づく、過去の言語行為の集積によって保証されるのにほかならない。また言語体系内の個々の記号の意味の規定は、ソシュールがいうように、他の記号との差異によって為され、言語体系内における諸記号の集合の相互規定によって個々の記号の意味は産出されるのであるが、この事もやはり、過去の言語行為の総体の集積に基づく事柄であるといってよい。Ⅲの「言語的意味」において述べたように¹³⁾、言語体系内において新しい意味を指示する記号の出現によって、差異化の変動が生ずるのは、全体的世界における新しい役割分担の出現による、全体的世界への新しい関与の仕方が、世界を新たなかたちで言語的に分

12) 拙稿「世界と意味体系」参照。

13) 同上。

節化することによってであった。全体的世界における新たな役割遂行は、全体的世界への新たな様態での関与であり、そのことは、世界についての、あるいは自己の企投についての新しい言語化を為すことにほかならないのであり、世界と自己との存在関係の新たな言語的差異化の出現である。新たな言語的差異化は、新たな言語記号の言語体系内における出現を意味し、そのことによって、言語体系内の差異の体系に変動が生ずる。つまり、新たな記号の出現により、既存の諸記号間の差異が解消され、差異ではなくなることに、ある記号が別の記号に吸収され、また新たな記号との間に新たな差異を生み出すことによって、記号相互間に新たな意味を現出せしめる。そうしたことが言語体系全体に連動することによって、言語体系全体が変様を被る。このように、人間と世界との存在関係、人間の世界への多様な関与の仕方が、言語的に差異化され、差異の体系を形成してゆくわけである。それゆえ、日常言語と身体的存在の世界への関与の仕方との間には、言語的差異化の形成過程において既に相互に関連性が有ったのであるといえる。したがって、日常言語と身体の企投の様式との間には、言語体系の有する秩序性と身体の企投の秩序性との相違にもかかわらず、相互関連性があり、日常言語は身体的企投の秩序性へと獲得された意味を表現しうるし、また日常言語によって表現された意味体系を身体のキネステーゼへと取り入れる、という相互交換が可能なのである。それに対して、数学的言語は日常言語のごとく、不特定の言語主体による言語行為の集積によってその体系性が確立されたのではなく、人為的なものであり、記号間の差異も、日常言語におけるごとき人間の世界への関与の仕方の差異、世界の分節の仕方の差異の投影ではなく、論理的にあらかじめ秩序付けられた差異にほかならない。カッシーラーは数学的言語について次のように述べている。「『数』の機能は、その意義からして、数えられうる対象の内容的差異から独立している。もしただこの機能の規定のみを展開することが問題であるならば、これらの差異は無視しうるし、また無視しなければならない。それゆえ、ここで実際抽象はひとつの解放として作用している。つまりそれは、主観的な表象のなりゆきに迫ってくるが、こ

の連関にとって何ら実質的構成契機をなさないすべての心理学的付随事情の拒絶の下で、関係連関そのものに論理的に専念 (die logische Konzentration) することである¹⁴⁾。「数の『本質』はその位置値 (Stellens Wert) に帰着する。そして位置の概念はここではまずより大きな論理的-一般性と広がりにおいて把握されなければならない。要求されている要素の区別可能性は、純粋な概念的條件に基づくのであって、感性的直観的條件に基づくのではない。カントが数概念を根拠付けた純粋時間の直観さえも、ここではさしあたり必要ではない。われわれは確かに、数系列の諸項を排列された列として思考するが、しかしこの列の概念は時間継列の具体的規定性をなにひとつ含んでいない。稲妻の後に雷鳴が続く如く、3が2の後に続くのではない。というのは、両者は時間的現実性ではなくて、ただ観念的論理的存立を有するにすぎない。続くという意味は、2が3の概念規定の前提をなしている、ということ、ある概念の意義は他の概念の意義が確立されている場合にのみ解明される、ということに限られる。小さい数はより大きい数の『前に置かれる (Vorausgesetzt)』。しかし、このことは物理的ないし心理的な先後を指しているのではなくて、概念的体系的依属の純粋関係 (ein reines Verhältnis der begrifflich systematischen Abhängigkeit) を指している。『より後の』位置が特徴付けるものは、それが基本単位から産出的関係をより複雑なやり方で適用することによって出現するのであり、それゆえ、それに先行する要素を論理的構成部分および段階としてそれ自身の内に含んでいる、という事情である¹⁵⁾。」すなわち、カッシーラーは、数字というものは、数えるという感性的経験に基づいて生じて来たものではなく、むしろ純粋論理的な連関によって形成されたものであるがゆえに、感性的に経験される実在のもつ差異性の要素は含んでいないと考える。カッシーラーは、そうした数字についての性格規定に基づいて、自然科学の性格付けの際に取り沙汰される経験

14) E. Cassirer: Substanzbegriff und Funktionsbegriff. Verlag von Bruno Cassirer, Berlin 1923 S. 50.

邦訳『実体概念と関数概念』山本義隆訳 みすず書房 45ページ。

15) Ibid., S. 51f. 邦訳 46fページ。

的、帰納的な面を自然科学という学の問題から排除する。「数学的概念に適合するすべての内容が、純粋な構成に基づくものであるということは、ますます顕著に、明瞭に示された。直観の所与はただ心理学的出発点を形成しているにすぎない。それは解釈し直され、我々が合理的法則に則って産出し、支配しうる別の形式の多様に改鑄されることによってはじめて数学的に認識される¹⁶⁾。」例えば、ケプラーがディコ・ブラーエの観測に基づいて火星の軌道を楕円であると考えたのは、火星の位置についての観測という感性的経験の集積に基づく帰納的な操作の結果ではない。「感覚が提供するものは、いつまでたっても、天空での多数の輝く点でしかなく、前もって受胎 (konzipiern) されるべき、楕円という純粋数学的概念によってはじめて、この離散的集合が連続的体系に作りかえられる¹⁷⁾。」このように、数学的言語によって自然を表現するということは、感性的所与を感性的所与として受容するのではなく、むしろ感性的所与のもつ感性的要素を排除することによって、感性的所与を数学的論理の枠組のうちに組み込むように改竄することである、とカッシーラーは考える。そして、その事は実体概念から関係概念へという図式で捉えられる。自然科学の歴史的発展の過程は、感性的、経験的な要素が含まれている実体概念から、感性的要素を排除した関係概念への移行の過程である。例えば、原子の概念ではデモクリトスにおいては、まだ感性的諸性質が付着していたのであるが、ボスコヴィッチ以降、原子概念は論理的な関係の項として捉え直され、質量等の感性的諸性質は払拭される。「広がりはあるが分割不可能な粒子のかわりに、今や端的に単純な力点が登場する。ここで、デモクリトス以来特徴的であった直観的諸性質の削減がいかに大幅に推進されたかが見てとれる。今や、原子の大きさや形態までもが消滅し、原子を区別するものは、ただ力学的作用や反作用の体系において相互に原子に割り当てられる位置だけである。広がりへの否定が感性的性質の否定に引き渡され、こうして一般的に経験的『事物』を他のものから区別するあらゆる

16) *Ibid.*, S. 153. 邦訳 134f ページ。17) *Ibid.*, S. 157. 邦訳 138 ページ。

内容的規定もまた否定される。すべての独立自存の性質は今や完全に払拭されて、あとに残るのは、ただ力点の相互的な引力と斥力の法則における動力学的共存の関係だけである¹⁸⁾。」

数学的言語が、カッシーラーが述べているごとく、感性的要素を、われわれの表現でいうならば身体的に把握された意味を排除することを本質とするのは、数学的言語が日常言語におけるごとく、諸記号間を連結せしめる統辞法が、過去の言語的行為の集積によって形成されたのではなく、論理的必然性によって記号と記号とが連結せしめられる、というところにある。数学的言語は、それゆえ、あらゆる事象を論理的関係性へと還元するのである。数学的言語における諸記号間の差異は、日常言語におけるごとき、身体的存在と世界との存在関係の分節化、人間存在の全体的世界への関与の仕方の分節化によるのではなく、数学的言語体系内における個々の記号のもつ論理的な機能の差異にほかならない。数学的言語の諸記号の有する意味は、数学的記号全体における論理的な機能の差異を担っているのにほかならない。したがって、世界における何らかの出来事を数学的言語の枠で捉えるということは、その出来事を論理的な関係性へと解体せしめて、その出来事を構成するもろもろの要素を、出来事全体の中での論理的な機能値へと分解することにより、その出来事の、人間存在とのあらゆる存在関係のもつ意味を払拭する。例えば、自然の数学化の試みをはじめて為したガリレオが、物体の落下運動を、物体の質量と関係なく常に等しいことを $S = \frac{1}{2}gt^2$ と定式化した。周知のごとく、Sは空間、gは常数、tは時間を表わすのであるが、ガリレオは物体が落下するという出来事を、いわば時間と空間との関係性へと置き換えることによって、落下速度は物体の質量と無関係に常に一様であることを主張した。われわれの身体的知覚機能によって知覚される物体の落下運動は、時間性と空間性とが融合した現象である。既に述べたように、われわれの身体の企投は、時間性と空間性ととの融合の中で為されるのであり、したがって、身体のキネステーゼとの相関関係において捉えられる現象も、時間と空間との関係

18) *Ibid.*, S. 210f. 邦訳 183ページ。

性としての現出というよりも、両者がその現象の中に溶け込み、現象の有する時間的側面と空間的側面とをわれわれは区別することはできない。つまり、物体は空間において、時間の経過の中で、落下という現象を引き起こすのであるが、われわれ自身の身体のキネステーズ感覚が、時間と空間とを分離せしめて、両者の関係として捉えるということを為さないがゆえに、その相関者としての落下運動も、落下現象のもつどのアスペクトが時間的でどのアスペクトが空間的であるかを、われわれは区別することはできない。しかし、物体の落下運動を数学的言語で表現すると、われわれの身体感覚においては区別しえない時間性の契機と空間性の契機が明確に分離せしめられ、落下運動は時間と空間との間の論理的関係として捉えられる。つまり、落下という現象の有する多様な要素が、時間と空間との論理的関係性として把握し直され、それ以外の他の要素は捨象される。全体的世界における人間存在と物体の落下運動との間には、様々な具体的な存在関係が有るはずである。例えば、ビルの屋上から誤って貴金属を落としたとか、工事中のビルの下を歩いていると、上から金属が落下してきた等々のごとく、物体が落下するという事態は、われわれの具体的な日常性の様々な側面において、全体的世界の意味構成の枠組連関に則した様々な有り方に対して、多様なかたちで関わってくる。そうした、全体的世界に沈澱している様々な意味連関を支える、相互主観的存在交錯へと連動する様々な存在関係は、物理学的自然科学においては、すべて捨象され、ただ時間性と空間性との関係においてのみ捉えられ、空間は時間の関数として時間性と関係付けられる。そして、その場合の時間も空間も、われわれが世界との関わりにおいて経験する時間と空間とは異なる。ベルグソンは数学的に捉えられる時間について次のように述べている。「数学者が時間 t の終りにおいて、ある体系の未来の状態を計算するとき、物理的宇宙がはじめの瞬間に消え失せて、突然現われると規定してもさしつかえない。問題になるのは t 番目の時点のみである——それはまったく瞬間的なものであろう。その間を流れるであろうもの、すなわち現実的時間は、問題にされないし、計算に入ることもできない。例え数学者がこの間隔の中に身を

置くと宣言しても、彼が赴くのはいつもある一点、ある一瞬間であり、すなわち時間 t' の末端である。したがって、時点 T' にいたる間隔はもはや問題ではない¹⁹⁾。」ベルグソンが述べているように、ガリレオが物体の落下運動という出来事の構成契機を成すものとして、出来事全体を関係性として捉えた一つの項としての時間は、物体の落下が開始される瞬間と、落下が終る瞬間との間の量的差異としての時間であり、したがって等質的なものである。その場合に、物体の落下の開始と終りという両端は、われわれが体験する「いま」を中心とした時間地平の何処にも位置しないものである。われわれが体験する時間は、われわれの身体的存在が世界へと関与している「いま」を軸として、過去と未来とが交錯することによって、未来へと展開される時間である。時間は、われわれの全体的世界における意味構成体への関与の中で体験され、われわれが自らの意図の実現のために世界へと企投する一つ一つの行為の遂行に則して、未来へと展開される。未来は、等質的な時間の継続のある先端として有るのではなく、われわれの企投のある完結にある。例えば、この仕事を終えて帰途につくであろう何時間か先に有るのである。そのように、われわれはわれわれの世界への様々な企投の中で時間を体験し、全体的世界がわれわれに課する時間の区切りに則して、われわれは自らの日常性を構成してゆく。ところが、ガリレオが落下運動の定式化の一つの項として考えた時間は、われわれの世界への関与の中で体験される時間地平の何処にも位置しない。落下運動の開始と終りの時点は、「いま」を中心とした時間地平の上の何処かに位置付けられたものとして有るのではなく、いわば、われわれの体験する時間性のもつ具体的諸相の抽象化である。落下運動の方程式は、先に述べたごとく、落下運動を、われわれの世界とのもろもろの存在関係の諸相の捨象によって、時間と空間との関数関係として解体し、構成したのであるがゆえに、その関数関係の一契機としての時間も、われわれの生活体験の中でのもろもろの企投に則して体験される時間性のもつ諸相の捨象化として、運動の始まりと終りとの間の量的差異のみを取り出した形式的

19) H. Bergson : *L'évolution créatrice*. Pres universitaires de France 1966 118^e édition. p. 22.

時間性である。したがって、落下運動の始まりとしての時間の一時点は、現在でも過去でも未来でもかまわないわけであり、同じように、運動の終りとしての一時点も、「いま」を軸にしてくり広げられる時間地平の何処でもかまわないのであり、問題は、両時点間の量的差異であり、それが空間的距離の量を導き出す量としての意味をもつにすぎないのである。同じく、運動の始まりと終りとの間の時間的量的差異から導き出された空間も、われわれの身体が占めている「ここ」を中心として繰り広げられる空間的地平の何処かに位置付けられるのではない。むしろ、その空間的距離を表わす量は、われわれが企投することによって何かを実現する場としての、世界の中の空間の何処であってもかまわないのである。われわれの身体的存在が位置する場を中心として、空間的な意味付けが為される「ここ」とか「あそこ」とか、「上」とか「下」は、われわれの身体の世界との存在関係において有意味的であるが、それは数量で表わされる意味とはまったく異なった意味をもつ。われわれは断えず「ここ」から「そこ」へと向かって自らの身体を投げかけることによって、「そこ」を自らの身体の空間処理能力の支配下に置くために、つまり「そこ」において何かを実現するために「そこ」を「ここ」へと転換せしめる。その結果「ここ」が「そこ」になる。われわれは全体的世界によって要求される、日常生活サイクルを構成する一つ一つの行為の実現のために、全体的世界の多様な意味体系が散乱する空間のいたるところを、自己の身体にとっての「ここ」にし、「そこ」と「ここ」との転換を為す。つまり、自らの意図実現にとって必要な場を「ここ」にするために、身体が存在する場を中心として断えず空間の超越を為す。さらに、われわれの日常性が構成されている生活空間は、数量へと還元される等質性をもたない。身体的位置が占める場としての「ここ」を中心として、空間的地平が繰り広げられるのであるが、その空間的地平も、全体的世界における役割分担の遂行にとっての独自の空間性として現出する。つまり、役割分担を遂行する身体的主体に対して開かれる空間的展望にとって、「ここ」を中心とした空間的距離は、数量へと還元されうる客観的な距離とは異なったアспектをもつ。

例え、数量的に近い空間的場であったとしても、自己の全体的世界での役割分担の遂行にとって無関係な場所であるならば、数量的に遙かに遠い空間的位置よりもずっと遠いことになる。したがって、われわれの世界関心の度合いによって、空間は遠近法的な展望を示すのであり、数量的な距離によってではない。われわれの日常的世界体験にとって現出する、そうした空間性は、数学的言語によって表現されることによって、われわれの世界との存在関係に基づいて有意味的に構成された空間性から、そうしたわれわれとの存在関係を断ち切った無機的等質的空間性へと変貌する。落下運動の定式における時間の相関項としての空間は、その定式全体が物体の落下速度の一様性を意味するのみであるがゆえに、われわれの周囲に、身体的存在の位置を中心にして繰り広げられる生活空間ではなくて、時間性との関数関係においてその具体的数量が規定される、物体の落下現象を構成する一契機である。

(8)

フッサールは、ガリレオによる自然の数学化について次のように述べている。「数学は物体的世界をその時間空間的な形態に関して理念化することによって、理想的客観性を創造した。数学は経験的-直観的形態がその中へはいつていると考えられる空間時間という、規定的な一般的生活世界の形式から、本来的な意味での客観的世界をはじめ作り出した²⁰⁾。」つまりフッサールは、自然の数学化によって数学的言語から独立した、あるいはあらゆる人間的営みから独立した理念性を築き上げたのであると考える。その理念性は、確かに文字言語というかたちで紙面の上へと物質化されることによって、世界の内へと固着せしめられたのであるが、しかし表現された理念性は、表現手段としての数学的言語とは独立していると考えられる。「およそ言表が為されているときには、それについて言われている主題的なもの(その意味)は、言表から区別され、言表それ自身は、言表している間は主題ではないし、主題にはなりえない。そして、ここで主題はまさに理念的対象に存している

20) E. Husserl. *op. cit.*, S. 30.

のであり、言語という概念の下にある理念的対象とはまったく異なる²¹⁾。」したがって、フッサールの『幾何学の起源』への序論でデリダが述べているごとく、例え世界を舐め尽くす大火があらゆる文献を消滅せしめたとしても、「真理はそれらの文書 (les écrits) にも本質的に依存しないが故に、それらはすべて絶対的理念が、その意味それ自身において冒されることなしに、破壊されるだろう²²⁾。」

しかし、はたして自然の数学化は、自然を理念化することであろうか。自然のもろもろの現象を、その現象を構成する諸要素へと解体して、そうした諸要素を関数関係へと再構成することによって、自然の、あるいは物体のもろもろの関係性のメカニズムを明示化しうるのであるが、しかし、そうした数学的言語によって表出された諸要素の関係性は、数学的言語を離れて存在する独立自存的理念体なのであろうか。いい換えるならば、数学的言語のもつ論理性的の枠組みの適応によって、諸要素を論理的に結び付ける関係性は、数学的言語に依存することなく、例え数学的言語が消滅したとしても、永遠に存在しうるイデア的理念態なのであろうか。

カッシーラーが述べているごとく、数学的言語の個々の記号の意味は、数学的言語体系内での個々の記号の論理的機能によって規定される。既に述べたごとく、数学的言語の場合には、日常言語のごとく、個々の記号の意味が人間存在の世界への関与の仕方の多様性に基づく世界の分節化と、その言語化に由来する、言語体系内の諸記号の相互差異化に依るのではなく、数学的論理の体系内における他の記号との論理的差異によって、個々の数学的記号の意味は規定される。したがって、個々の数学的言語記号は、数学的言語記号体系内における諸記号の論理的差異の全体を離れて、その意味はない。例えば、虚数は正の実数から負の実数への数系列において、正の実数を負の実数へと転換する際の不連続の間隙を埋める論理的機能を要するために、要請

21) E. Husserl. *op. cit.*, S. 368. L'origine de la géométrie traduction et introduction par Jacques Derrida. Presses universitaires de France. Paris 1974, p. 180.

22) Jacques Derrida *ibid.*, p. 94.

されたものである。²³⁾ そうした数学的言語を自然界の様々な現象へと適応せしめることは、自然界の様々な現象を数学的論理の枠組に適合せしめることであり、自然現象を数の法則性の下へと従属せしめることにほかならない。自然の中には、いい換えるならば諸物体間のもろもろの関係の間には、数学的論理が介在しているわけではないのであり、有るのは物体相互の力関係にほかならない。そうした、物体相互の力関係に数学を適応することによって、その力関係のメカニズムを、数学的論理の関係性へと置き換えることが可能なのである。例えば、「温かさという直接的感覚と温度という厳密な概念との間には大きな隔たりが有る。より強いとかより弱いとかいう不規則的な印象は、確実な数値を得るための手懸りや評価を決して提供しない。私は測定の基本図式を設定するだけでも、主観的知覚から、熱と膨張の間の客観的関数関係へと移行しなければならない²⁴⁾。」つまり、物体についての感覚的所与は、それ自身数学的な要素はまったくもないのであり、それを数学へと還元するためには、測定のための数学的関係の体系をそれに適応しなければならない。われわれの身体的キネステーズに与えられた物体Aと物体Bの重さの感覚と、物体Aが1 kg、物体Bが1.3 kgという数値との間には、いかなる対応関係もないのであり、重さの感覚を数値へと置き換えるためには、感覚的要素を排除し、物体AとBとを重さの測定基準体系へと適合せしめなければならない。そのように、重さの感覚を数値へと置き換えることによって、物体Aと物体Bの重さの数学的比率が導き出されるのであり、両物体の重さについての数学的関係性が明示化されるのである。ガリレオが物体の落下現象を、空間と時間との関数関係の方程式で表現する場合にも、物体が落下する空間的距離が時間の二乗に比例するという、時間と空間との比例関係は、われわれが知覚する物体の落下現象にはないのであり、先に述べたように、われわれの身体的知覚に与えられるのは、物体がある時間の経過の中をある空間的距離を移動するという、いわば落下する物体を軸にした時間と

23) 田辺元「科学概論」『田辺元全集 二』筑摩書房 1976、212ページ。

24) E. Cassirer, *op. cit.*, S. 188. 邦訳 165ページ。

空間との融合現象のみである。空間が時間の二乗という関係自体が数学的論理の枠組の中でのみ意味を有する事態であり、身体感覚が経験する落下現象の中には、二乗という数学的概念さえないであろう。「しかし、自然自体の中には、そうした関係性が有る」といった議論が無意味であることは、先に述べたごとく、われわれは自然自体といったものを経験しえないのであり、自然はわれわれの身体による知覚に対して現出するか、あるいは数学的關係性において捉えられるか、もしくは日常言語によって、知覚された自然を表現することにより、言語を介してわれわれに現前するか、いずれかであるからである。それゆえ、数学化された自然は、われわれの身体によって知覚された自然現象といかなる共通項ももたないのであり、両者の間には共約する要素は何もない。したがって、自然の数学化は、感覚的要素を排除することによって、自然の有するメカニズムをより厳密にわれわれに示してくれるという意味において、フッサールが述べるごとく、自然の理念化であり、客観化であるということではできるであろう。しかし、そうした数学的言語によって表わされた理念的客観性は、フッサールが述べるごとく、プラトンのイデアのように数学的言語を離れて独立自存するものであるということではできない。それは、あくまでも、数学的言語体系内での論理的機能値を有する個々の記号によって、論理的に関係化されることによって、有意味的であるのであり、それを離れて数学的論理が自然の内に内在しているということではできないのである。

ガリレオは『新科学対話』の中で、ヴェネチアの市民ザグレートと、ガリレオの分身であるサルヴィアータティとの間の問答形式で、次のように述べている。「ザグレート——必然的な論証——それは専ら数学的なものなのですが、——の力は驚きと喜びとで一杯にします。私は多くの砲手達の報告を信頼して、大砲や臼砲の飛行のあらゆる射程距離において最大のもの、つまり砲弾を最も遠くまで届かせる距離は、半直角の仰角、彼らの言葉遣いでいえば象限の第六点において得られる、ということを手ずで知っていました。しかし、なぜそうなのか理由を知ることは、他人の証言や、さらに幾度も繰り返

返された実験から得られた単純な情報を無限に超えています。サルヴィアティ——あなたは大変うまくいってくれました。その原因を通して獲得された一つの結果についての知識は、実験を繰り返すことなく他の諸結果の理解と確証へと導いてくれるのです。まさしく今の場合がそれで、著者は論証的論議によって、あらゆる射程距離で最大のものは半直角の仰角のときであるということを実証に示し、おそらく実験によっては観察されていないことをも我々に論証しました。これは他の射撃についてで、仰角が半直角から等しい角だけ、超過もしくは不足していても、それらは互いに相等しいということです²⁵⁾。」

引用文において、ガリレオは数学的論理の組み合わせによって、砲弾の角度が半直角のときに最大の飛距離を得るということを実証したこと、数学的な言語による論証と経験的事実とが一致したことを述べている。ガリレオにおいて画期的なことは、中世の科学者達が数学的言語を現実世界の自然的メカニズム解明のための方法とすることなく、もっぱら思弁的に論証のための論証として数学を用いて、それが現実世界の自然秩序の解明になるか否かについて、まったく顧慮しなかったのに対して、数学を現実世界の自然秩序の解明の方法として用いたところにある。²⁶⁾ こうした、ガリレオによる数学的論理の自然への適用について、われわれの今までの立場から考えるならば、どのようになるであろうか。ガリレオは、本来理論家であって実験を重視しなかったプラトニストであると主張するコイレやカッシーラー、バートの立場と、ガリレオは実験的科学者であると主張するストリングやオルシュキの立場との論争²⁷⁾に関しては、ここでは本筋に無関係なので言及しない。問題は、数学的言語と自然との関連性の問題である。ガリレオが砲弾を最も遠くまで飛ばす発射角度を問題にすると、既に自然の中に、いい換えれば物体相互の関係性の秩序の中に、数学的概念を導入しているのである。つま

25) ガリレオ『新科学対話 下』今野武雄、日田節次訳 岩波文庫 1948、194fページ。

26) 佐々木力『科学革命の歴史構造 上』岩波書店 1985、89ページ。

27) 同上書 159～185ページ。

り、砲弾の最大飛距離、発射角度という概念自体既に数学的概念であり、そうしたことを問題にするということ自体が既に、数学的な論理の枠組というフィルターから自然を見ているということであり、自然を数学的な論理へと引き寄せているということにはほかならないのである。確かに、ガリレオは実験においてではなくて、数学的な論証によって、砲弾の最大飛距離の角度が半直角であることを導き出したのであるが、しかし、自然を砲弾の最大飛距離に関する発射角度という関点から見ることは、つまりそのような問題設定をすること自体が、自然を数学的な論理の枠組の中に入れていているということにはほかならない。自然の中に数学的論理に対応する関係性が内在しているというよりも、むしろガリレオが自然の中に数学的な問題意識の下に、数学的な問いかけを為しうる問題状況を設定することによって、自然を数学的な論理の枠組の中に押し込んだのである、といった方が適当であろう。なぜならば、そうした問題状況の下以外において、自然の中に砲弾の発射角度とか、砲弾の最大飛距離等といった概念は存在しないのであり、角度とか最大飛距離といった概念自体が、現象を数学的な基準体系に基づいて見ることに由来するがゆえである。物体の運動を発射角度において見るということは、既に物体の運動という自然現象を数学的な基準体系の枠に当てはめて、自然を数学的な論理へと引き寄せているということにはほかならない。また、最大飛距離という概念も、空間を数学へと還元することによって、空間を数学的な測量規準に基づいて比較するという操作無しには出て来ない。したがって、ガリレオが数学的方法によって論証した、「物体は半直角の角度において放射するならば、それ以外のいかなる角度において放射するよりも、最も飛距離が長い」という命題は、自然界の法則を数学的に証明したというよりも、自然を数学的概念、数学的論理の関係性へと適用することによって導き出したものであると見てよいだろう。したがって、やはりその命題の真理性は、数学的方法、数学的論理を離れて有るのではなく、そうしたものに依存することによってのみその真理性を維持しているものであり、自然を数学的に裁断することの中においてのみ、有意味的でありうるのである。

(9)

既に述べたように、学的意味は、人間存在の全体的世界における企投の構造を表わす文字言語^{エクリチュール}によって表出される。自然科学においても同様である。自然科学が数学的言語によって自然を分節し、自然を数学的関係性へと分解することも、人間の全体的世界におけるある企投の構造を表わしているのである。ガリレオが物体の落下運動を、 $S = \frac{1}{2}gt^2$ という方程式のごとく、時間と空間との関数関係において捉えるとき、ガリレオは自然への関わりの構造化を為しているのにほかならない。確かに、物体の落下運動についての方程式において、直接的には人間存在の自然への企投は表現されていないのであるが、数学的言語という、全体的世界のうちに歴史を媒介として沈澱した、事象を論理的関係性において捉える表現手段を用いて物体の落下運動という事態を表現するということが、人間と物体の落下運動という現象との存在関係の構造を間接的に表現しているのにほかならない。先に述べたように、物体の落下運動を時間と空間との関数関係において捉えることによって、時間と空間とは比例関係の両項へと分解されるのであるが、その場合の時間と空間とはわれわれが全体的世界の中で構成された意味秩序への日常生活における適応としてのもろもろの企投に際して体験する「ここ」と「今」を軸として展開される地平性のうちに現出する時間空間とは異なるものである。数学的関係性の両項として位置付けられる時間と空間は、われわれの身体的存在と世界とのもろもろの存在関係の中において現出する時間空間ではなくて、それらは物体の落下運動という自然現象を構成する契機としての時間空間にほかならず、数学的な測定基準体系へと還元された時間と空間である。したがって、落下運動の構成契機としての時間と空間とは、われわれの生活体験において「いま」と「ここ」を中心として現出する、われわれのもろもろの企投において、両者の融合されたかたちで体験される時間空間ではない。そのように、時間空間を数学的測定基準体系へと還元することによって、両者の比例関係において物体の落下運動を表現することは、日常的生活体験において現出するとき、われわれの身体的な時間的空間的位置関係との相対に

において捉えられる曖昧さを払拭して、事象を数学的論理的関係性の枠組のうちに捉えることによって、事象のもつ意味性を論理的関係性のうちに固定化することにほかならない。すなわち、物体の落下運動を時間性と空間性との比例関係において捉えることによって、ガリレオは物体の質量に関係なく、物体は一樣の速度で落下するというこの意味を、数式へと固定化したのである。したがって、そうした試みは、自然現象のうちに数学的意味を引き出すための人間の企投であり、自然を数学的な論理において捉えることによって、自然を数学化する試みである。時間と空間との比例関係の数式において直接的に表現されているのは、物体の落下の構造であり、人間の企投の構造ではないが、落下運動を数式化することによって、そこに数学的な意味を浮き彫りにさせる試みは、人間の企投にほかならないわけである。したがって、自然の数学化において、自然を数学的な言語によって表現することにより、自然現象を数学的な論理の関係性の下で捉え、そこから数学的な意味を現出させようとする、人間の企投が間接的に表現されているとあってよいだろう。そして、そうした人間の自然への企投は、もろもろの数式へと結実することによって構造化される。つまり、数式において、自然現象が数学的に把握され、数学的な論理の枠組が表出する意味へと還元されるのであるが、自然を数学的諸要素へと還元することによる、そうした関係化は、人間存在の自然の数学化の試みの構造を表現しているといつてよい。一つ一つの数学的言語の数学的論理に基づく組み合わせによって、数式全体がある数学的な意味を表現しているのであるが、そうした数学的言語の組み合わせの一つ一つは、人間の企投の試みの反映であり、そして、組み合わせの全体が、そうした人間存在の企投の構造の反映、つまり数学的言語という表現手段によって媒介された人間存在の自然の数学化の試みの構造の間接的表現であるといつてよいだろう。数学的言語の組み合わせによる全体としての数式において、人間存在の自然の数学化の試みが分節されているのであり、ある記号にある記号を結びつける試みの一つ一つが、人間の自然への企投の、つまり自然を数学的に表現しようとする試みの反映であり、全体としての数式において、自然

の数学化のある試みが秩序付けられ、構造化されているのである。

(10)

最後に学的意味と日常生活体験との相関関係について言及する。フッサールは、『自然の空間性の現象学的起源についての基礎研究 Grundlegende Untersuchungen zum phänomenologischen Ursprung der Räumlichkeit der Natur』²⁸⁾ という手稿において、コペルニクスの地動説に反して、われわれの日常的身体感覚にとって地球は物体としての意味を喪失し、われわれの身体が自らの存在基盤を獲得する唯一の大地であると述べている。「私はときとして『静止している地球』といたりすることがある——しかし統一的な地球地盤としての『地球』は、文字通り『ひとつの』物体についていえるような意味で静止しているものとして経験されることはできないし、またそれゆえそのような意味では物体として経験されることはできない。『ひとつの』物体といわれるものは、延長と性質をもっているばかりではなく、空間中にその『場所』をもっている。しかし、もし可能であればそれを交替したり、そこに静止したり、あるいはそこから動かされうるものとしてもっている。私が新しい地盤の表象をもたない限り、つまり〈地球が、整然とした回帰的な運行のなかで、運動や静止のなかにある閉鎖的物体としての意味をもちうようになるための新しい地盤〉の表象をもたない限り、そして私がそれら地盤の交換についての表象やその交換を通して二つの地盤が物体になってゆく表象をもたない限りは、地球はまさしくそれ自身地盤であって物体ではないのである。地球は動かない——おそらく私は地球は静止しているのだと言ったりする場合があるであろうが、そうした場合は、私や他の人々によって分解されて生ずる、または自ら分解して生ずる地球の各断片が静止したり、運動したりするという、それらが物体であるということを単にい

28) この手稿は1940年にマルヴィン・ファーバーによって編集されたフッサール追悼論文集 Philosophical essays in Memory of Edmund Husserl. New York (305~325ページ) に発表された。

っているだけのことである。地球はひとつの全体である。その諸部分の方は分解されたものや分解されうるものとして、それだけを考慮すれば物体である。しかし『全体』としてみれば地球は物体ではない。ここにあるのは、物的諸部分から『成り立っている』ひとつの全体であるが、それでもやはり物体とはいえないのである²⁹⁾。」地球はわれわれの日常的な身体感覚に対して現出する限りにおいては、われわれの身体も含めたあらゆる存在者がその存在性を確保している地盤としての意味しかもたず、何らかの物体と並置されうる物体性としての意味は喪失している。確かに、地球は天文学や地球物理学がわれわれに教えるところに依れば、一個の物体には違いないのであるが、しかしわれわれは日常的には地球の物体性を体験することはできない。なぜならば、地球は「われわれがそこで生きる大地、すべての静止と運動がその上に浮かび上がる背景であるが故に、静止と運動の手前にある大地、諸物体が分裂によって生ずる『基盤 la souche』であるが故に、諸物体から出ていない大地、すべての場所を包み込むものであるが故に、『場所』をもたない大地、ノア^{はこぶね}の方舟が生き物を洪水から救ったように、すべての個別的な存在を無の上に支える大地³⁰⁾」であるからである。われわれが日常的に経験する限りにおいて地球は、あくまでもあらゆる存在者がわれわれの世界とのつながりの脈絡のうちへと現われる背景であり、それ自身が自らの存在を主張することはなく、われわれの身体的存在のもろもろの企投に対して現出する様々な存在者の背後に、われわれの企投やもろもろの存在者を支える基盤として潜んでいるのである。われわれは、われわれの存在を支える地球の存在を普段は意識することなく、身体的存在に対して現われる知覚領野のみを、さしあたって自らが関わりうる世界とする。「大地は実際、すべての対象物体の手前があると共に彼方にある。それらはあらゆる対象—物体に—特にコペルニクスの大地に—土壌として、その相対的現われのこことして、先行

29) E. フッサール「自然の空間性の現象学的起源についての基礎研究」新田義弘、村田純一訳『講座現象学 3』弘文堂 1980、275～276ページ。

30) M. Merleau-ponty. *op. cit.*, p. 169.

している。しかし大地は、その無限な地平としてすべての対象-物体を超えている。というのは、そこに由来する客観化の作業 (le travail d'objectivation) によっては決して汲み尽くされえないから³¹⁾。」しかし、「私が世界についてコペルニクス体制の下で教育されるにつれて、私は私の出発の状況を捨て、絶対的観察者を装い、私はすべての他のものを養っている、私の大地への根ざし (ma racine terrestre) を忘れ、代置可能な対象しかない、無限な思惟の純粹対象として世界を考えるようになる³²⁾。」すなわち、天文学はわれわれに、地球も単なる物体であり、しかもそれは宇宙の中心ではなくて、銀河系の片隅に位置する太陽系の一惑星でしかないことを教える。そうした、われわれの身体的な位置を原点としてのみ世界を見る日常的な視点を離れた視点から世界を見る見方を通して、われわれは、メルロ＝ポンティがいうごとき、世界に対する絶対的観察者となるのである。つまり、われわれは日常的な世界を見る視点、身体的位置を原点として、そこから空間的・時間的地平が開かれる視点の上に、そうした身体的位置を超出した視点から、あるいは身体にその存在の基盤を与えている地球をも超出した視点から世界を見る視点を重ね合わせることによって、あらゆるものの現出の背景として、また無限な地平として広がるこの地球も、他の天体と並置されうる単なる物体でしかないことを学ぶのである。したがって、日常的な視点からするならば、あらゆる存在者の背景として無限に広がる地球は、われわれの日常的な身体感覚に対して開示されるごとき無限性を有しているのではなく、他の天体と同じ丸い物体でしかないものであり、日常的な視点にとってあらゆる存在者を包括する絶対的基盤も、実はより広大な宇宙空間を漂う一物体でしかないものであるということ、日常的な視点の上に重ね合わせる。かくして、コペルニクス革命以前の時代の人々の大地についての意識と、コペルニクス革命以降の人々の大地についての意識とは異なるものであろう。コペルニクス革命以前の時代の、プトレマイオスのパラダイムが全体的世界における宇宙

31) Jacques Derrida. *op. cit.*, p. 81.

32) M. Merleau-ponty. *op. cit.*, p. 169.

秩序の説明原理として定着していた世界においては、人々の大地との基本的関わりは現代と大差ないが、人々は大地をあらゆる存在者を包括する絶対的基盤であり、また、あらゆる天体の中心とみなしていた。しかし、コペルニクスのパラダイムが全体的世界において、宇宙の秩序の説明原理として定着して以降、大地はあらゆる存在者を包括する絶対的基盤であることにかわりはないが、しかし、それは他の天体と相対するとき崩れ去る危険性を孕んだ絶対的基盤でしかなくなる。例えば、夜空を仰いで無数の星を眺めるときに、己れの身体が立っており、あらゆるものがその上に存在しているこの大いなる大地も、天空の無数の星と同じ、あるいはそれより小さい天体にすぎないと考えるならば、自らが立っているこの絶対的基盤としての大地の、絶対性を剥奪していることになる。われわれは学的意味の獲得を通して、自らの身体的位置を原点として開かれる世界地平を相対化し、身体感覚を介して知りえる限界を超えた世界空間について知るようになる。われわれの時間意識は、今を中心に過去と未来へと繰り広げられる時間地平よりなっているが、しかし、その場合の過去も未来も、われわれが経験した、あるいは経験しうる時間性である。しかし、学的意味は、われわれの時間地平を超出した膨大な時間的流れについてわれわれに教える。われわれは己れが経験した時間の流れが、宇宙生成の膨大な時間の流れに比して、あるいは人類の歴史に比してさえも、とるに足らないものでしかないことを知る。われわれは自らの身体が位置する「いま」という時間が、どのような歴史的経過を経て到達された時間であるのか、を知ることによって、自らが位置する時間の歴史的な位置を知るようになる。このように、学的意味は日常的身体感覚を超えた視点からの世界についての様々な展望をわれわれに与えることによって、われわれの日常的な世界意識を変様せしめ、相対化せしめ、かつ、自らの位置する時間的空間的場についての位置付けを為す。

付記・本稿執筆にあたって、山岸憲治教授（徳山大学、理論物理学専攻）より、幾つかの貴重な助言をいただいた。感謝申し上げたい。